

【九州国立博物館】（計6件）

<彫刻>（1件）

1 名称	重要文化財 男神坐像（じゅうようぶんかざい だんしんざぞう）	品 質	木造彩色
作者等		員 数	1軀
時 代	平安時代 12世紀	寸 法 等	像高50.9
作品概要	細長い目の上唇を突き出した面相、胴長で奥行きが薄い体部や脚部の膝張の狭さ、簡略化した衣文表現、素地に直接白土下地彩色とする技法などは平安時代後期・12世紀頃の神像彫刻の特徴を備えている。当館収蔵の「女神坐像」（C63）とは、上記の特徴にくわえて、ヒノキの一木造りで体側部に別材を矧ぎ付ける構造、白点で構成された花文などの特徴も酷似している。また、体幹部材の幅がほぼ一致し、像底にみえる年輪幅もよく似ており、両像は同木から彫出した一具の像の可能性が指摘されている。本来「女神坐像」（C63）と対をなしていたと考えられる本像が収蔵品として加わることで、両像の造立当初の安置状況を復元することができる。		
購入金額	225,000,000円		



<刀剣>（1件）

2 名称	重要文化財 短刀 銘左ノ筑州住（じゅうようぶんかざい たんとう めいさ ちくしゅうじゅう）	品 質	鉄・鍛造
作者等	左 筑前国	員 数	1口
時 代	南北朝時代 14世紀	寸 法 等	総長35.3 刃長25.4 反0.25
作品概要	平造、庵棟、身幅やや広く、反わずかにつく。鍛は小板目詰んで綾杉風の大肌を交え、地景入り、地沸厚くつく。刃文は沸出来で、湾れに小互の目をわずかに交え、中程から先にかけて焼幅広く、ところどころに荒沸交じる。総体に砂流し、金筋かかり、特に上半には強く砂流しがかかる。帽子は乱れ込んで突き上げ、沸強く付き、先強く掃き掛ける。茎は生で、舟形で反り付き、先浅い刃上がり栗尻。鑓目は大筋違、目釘孔2つ開く。指表に「左」、指裏に「筑州住」の銘を浅く切る。鍔は金無垢台付二重鍔で、上貝下面には毛彫で「長」「左文字」を刻む。拵は金沃懸地桐紋散靴合口拵。		
購入金額	30,000,000円		



<染織> (2件)

3 名称	白繪子地雪持笹に松竹梅島台宝尽し文様繡小袖 (しろりんずじゆきもちざさにしょうちくばいしまだいたからづくしもんようぬいこそで)	品 質	表：絹 (繪子) / 総刺繡 裏：絹 (胴裏は紅絹・八掛は綾)
作者等		員 数	1領
時 代	江戸時代 18世紀初頭	寸 法 等	丈151.5 衿60.0 (後幅30.0 前幅22.5 衿幅16.0 衿幅11.3 衿下76.0 袖丈55.2 袖付26.0 袖幅30.0 衿肩あき9.5)
作品概要	松竹梅や島台、宝尽くしの吉祥文で構成した総繡い小袖。文様とフキの厚みから、婚礼に際して着用された打掛と考えられる。本品のような、腰の上下で文様が途切れる立木文様は、江戸中期のはじめ頃から好まれるようになった。婚礼にまつわる白地に吉祥文様を配した衣装としては、19世紀前半ごろの遺例に複数確認されるような、波間の岩より松竹が伸び、鶴亀があらわされる蓬莱文様の小袖がある。本品は、松竹梅の構成が蓬莱文様小袖とは異なること、桜の花や雪輪の表現や、左腰にわずかに余白を残す構図に古様が見られることから、元禄期 (1688-1704) ごろの製作と考えられる。蓬莱文様の小袖に先行する婚礼衣装は遺例が少なく、貴重な作例である。		
購入金額	3,850,000円		



4 名称	浅葱平地垣に梅菊文様友禅小袖 (あさぎひらじかきにうめきくもんようゆうぜんこそで)	品 質	表：絹 (平絹) / 友禅染 裏：絹 (平絹)
作者等		員 数	1領
時 代	江戸時代 18世紀前半	寸 法 等	丈149.5 衿64.0 (後幅31.5 前幅23.8 衿幅15.0 衿幅11.6 衿下61.0 袖丈60.0 袖付60.0 袖幅32.5 衿肩あき10.0)
作品概要	友禅染の小袖。本品は左腰に空間を開けた文様構成や、垣の内側を白場にのこす表現、生地に縮緬が用いられていないところに古様が見られるが、花卉に用いられる反対色のぼかしや、背面から前面にかけての文様にやや連続性が見られる構成からは、時代が下る様子が見られる。元禄13年 (1700) の雛形『当流七宝常盤ひなかた』には、植物文は伴わないが、屏風を同構図で配する作例が見られる。これらにより、本品は元禄から正徳頃にかけての江戸中期の作例と考えられる。友禅染が萌芽期から円熟期へ移行する時期に作成された優品である。		
購入金額	2,750,000円		



<考古> (1件)

5 名称	埴輪 武人 (はにわ ぶじん)	品 質	土製
作者等		員 数	1軀
時 代	古墳時代 6世紀	寸 法 等	幅：36.0 奥行：24.0 高：113.0
作品概要	群馬県伊勢崎市上武士天神山古墳出土とされる武人形埴輪である。胃をかぶり、肩甲と手甲をつけ、大刀と刀子を腰に佩いて武装した男子をあらわす。胴甲は着けず前合せの服を着用し、胃の鐙の内側に下げ美豆良を下げ、首には丸玉を連ねた首飾りをつけており、葬儀に参列する武人をあらわすものか。胃は横矧鉾留衝角付胃と呼ばれる形式をよく再現し、また上衣の前合せ部のとじ紐、刀子の鞘、靴に縫い目が表現されるなど、細部の表現に見ごたえがある。伝えられる出土地は古くより多くの形象埴輪の出土で広く知られる。		
購入金額	23,500,000円		



<歴史資料> (1件)

6 名称	帝鑑図説 (ていかんずせつ)	品 質	紙本活字墨刷
作 者 等	(原本) 張居正・呂調陽編、(秀頼版) 西笑承兌跋	員 数	6冊
時 代	江戸時代 慶長11年 (1606)	寸 法 等	(前集〈第1冊-第4冊〉) 縦28.5 横19.2 厚1.5-1.7、(後集〈第5冊・第6冊〉) 縦26.9 横19.0 厚1.2-1.4
作品概要	<p>『帝鑑図説』は、中国古代皇帝の善蹟(前集・聖哲芳規81話)と悪行(後集・狂愚覆轍36話)の逸話を集めた挿絵入りの書で、明時代後期の大学士・張居正らが10歳で即位した万曆帝のために編纂した。万曆元年(1573)刊行の潘允端版(宮内庁書陵部蔵)や複数の明版があるほか、日本でも豊臣秀頼への献辞を伴う慶長11年(1606)刊の古活字版(秀頼版)など多数の版が出版された。</p> <p>本資料は、和刻本のうち最も刊行年の早い秀頼版に該当する。その内容は、陸樹声序文、張居正進図疏、前後集題字・目録・本編(図見開き一丁、本文9行)、後跋、王希烈後叙、西笑承兌跋文からなる。前集4冊と後集2冊の大きさが異なるため後世に一式として整えられた可能性があるが、第6冊巻末に西笑承兌の跋を有する稀少な「有跋本」として知られる。</p>		
購入金額	9,500,000円		

